

教務課	高校 教材研究・生徒に関わる時間増を目指すし、業務軽減できる工夫を行う。	成績個票を観点別に合わせた様式に変更し、転記等しやすくした。Teamsを活用し、配布物や印刷物も減らしている。	4	3.8	誰もがスムーズに業務が行えるよう、今まで口伝的であった部分の業務内容のマニュアル化を進めていく。	4	4	4	4	4	4	4	4.1
	高校 新学科の検討を行う。	現状の問題点の把握に努め、課内での意見交換の場を複数回設けた。	3		教科の特性や、教員個々の価値観に左右されすぎずに、育てたい生徒像、教育観を確立していく必要がある。	3	4	3	4	4	3	5	
	高校 基幹システム、観点別評価を全教員へ周知徹底を図る。	基幹システムに関する説明会を新任教員等に行った。また各学期、評価について助言を繰り返し、具体的な方策を示した。	4		引き続き、観点別評価の妥当性を検討する必要がある。担当ごと大きな差がでないよう指導する。	4	4	4	5	4	4	4	
	中学 質の高い授業を展開し、自ら学ぶ姿勢や力を育む。	授業研究をする時間を確保をした。	4		常にアップデートをしていき、質の高い授業を展開する。	4	4	4	5	5	4	4	
	中学 基礎学力の定着を図る。	一人ひとりにきめ細かい指導ができるように、生徒情報を共有できる場を確保した	4		「学び方」の徹底を目指していく。	4	4	4	5	5	4	5	
理数科	進学指導のノウハウの共有を図る。	従来の取り組みを活かしつつ、生徒の実態に応じた指導の見直しを進めている。	4	3.7	学年間の縦の繋がりも強くしていきたい。	4	5	4	5	5	4	5	4.3
	新学科の検討を行う。	理数科と国際C科のコンテンツを融合し、新たな特色作りを検討している。	3		近年国際C科の募集が順調で、その要因を分析し新学科の検討を進めたい。	3	5	3	5	5	3	5	
	アドバンスコースのプログラム再編を検討する。	SSH関連他魅力あるプログラムを継続させている。理数科の水質調査も復活させようとして計画している。	4		他校のカリキュラムも研究した結果、進学実績を出しているカリキュラムの多くは3年次では主たる受験教科の比重が大きい。芸術や体育の履修学年も検討していく。	4	5	4	5	4	4	4	
国際C科	Global教育のプログラムを改善検討する。	SKYSEFでは海外生徒パディとして活躍した。台湾の高校生と交流授業を行った。	4	3.7	対面での交流が可能となったため、海外研修や留学生の受け入れ機会を増やす。	4	4	4	4	5	4	4	4.0
	新学科の検討を行う。	生徒の幅広いニーズに対応する学科づくりのため文理融合も視野に入れて検討をした。	3		教員間の共通認識を深め、国際コミュニケーション科だけでなく、学校全体での取り組みを進める。	3	4	3	5	4	3	4	
	国際C科の魅力を再構築する。	実践的な英語力を養うとともに、着付け、藍染、能などの日本の伝統文化を体験した。また、体験入学、入試説明会を通じて外部に科の活動を発信をした。	4		イングリッシュサマーキャンプの実施を含め、コロナウイルス感染症で制限される以前の活動を全て再開できた。今後、新たな体験活動を検討する。	4	4	4	5	4	4	4	
普通科	高大連携プログラムを再構築する。	大学との検討会を何度も積み重ね、新たなプログラム作成を構築した。	4	4.0	実際に実施し、検討と改善を重ねていく。同時に時間をかけながら全職員にプログラム内容を周知していく。	4	4	4	4	4	4	5	4.0
	法人内各学校の魅力を発信する。	普通科の1年生に法人内・間との連携講座を複数回実施した。	4		各学校の卒業生の活躍や動向を伝え、選択幅を広げる必要がある。中学生への説明会での発信も重要である。	4	4	4	4	4	4	4	
	法人内各学校への進学者数を確保する。	普通科の1年生にコース説明会を実施した。2,3年生にはオープンキャンパス参加の情報提供を行った。	4		各学校の最新プログラム内容や様々なイベント情報を細かく発信し、オープンキャンパスに繋げていく。	4	4	4	4	4	4	4	
課外講座推進課	課外活動講座の実践と参加者増の工夫を行う。	アントレプレナーシップ教育プログラムをはじめとする課外活動や出前講座等の企画・運営を行った。	4	4.0	生徒が主体的に活動したくなるような内容を充実させる。	4	4	4	5	5	4	5	4.4
研修	若手教員の育成を行う。	定期的に研修を行い、指導法などを育成した。	4	4.0	若手教員育成の継続と、中堅以上の教員が手本となる言動を目指す。	4	4	4	5	5	4	3	4.1
	学習指導力やクラス経営力の向上を図る。	今年度は各教科研究授業を定期的に実施して抱き、学習指導力の向上を図った。	4		指導力の向上のために、振り返りを行い、次年度以降につなげていく。	4	4	4	5	5	4	3	
ICT教育	ICT教育環境の充実を図る。	ICTを活用した個別学習を推進する。学習履歴を活用し、苦手分野を特定して個別指導を強化する。	4	4.0	教員向けICT研修を実施しながら、デジタル教材を効果的に活用できる体制を整備する。	4	4	4	5	4	4	4	4.0
	スタディサブリの有効活用を促進する。	学校全体で活用モデルを共有し、成功事例を蓄積・展開する。	4		ICTリテラシー教育の強化（情報モラル・ネットリテラシーの指導）を行う。	4	4	3	4	4	4	4	

教科	国語	社会生活に必要な国語の知識や技能を身につけ、我が国の言語文化に対する理解を深める。	文章読解、知識・技能を身につけるための演習を実施する。	3	3.0	知識・技能の習得に割ける時間の確保と成果の両立を目指す方針を検討する。	3	4	4	4	4	4	3	3.8
		共感し想像する力、創造的に考える力、他者と伝え合う力、思いや考えを広げ深める力をつける。	ディスカッション、レポート作成、比べ読みを授業等で実施する。	3		チームで同じプログラムを実施するにあたり、教員の技量や練度、評価のあり方の統一化を目指す。	3	4	4	5	4	4	3	
	地公	新課程移行完了年度の総括を行う。	総合科目と探究科目の連携を進め、共通テストからの検証を行った。	4	4.0	教科書を網羅するのだけではなく、精査した内容の授業を展開していく。	3	4	4	5	4	4	4	4.0
		生徒の主体的な学習意欲を喚起できる授業を行う。	ICT教材の活用と双方向の授業構築をめざした。	4		教科研修の時間を十分に確保する。	4	4	4	5	4	4	3	
	数学	教科指導力の向上を図る。	今年度より、年間5回の教員間授業研修を行ったり、オープン授業期間を長く設けたりした。	4	3.5	学年、科、コースでの目標を共有し、教員間意識の統一を図る。	4	4	4	5	4	4	3	3.9
		新学習指導要領に対応した受験指導力の向上を図る。	個別指導や習熟度編成を実施することで、生徒の学力に応じた共通試験・2次試験に対応した教科指導を行った。	3		引き続き新学習指導要領からの出題傾向を分析し、データを蓄積する。	3	4	4	5	4	3	3	
	理科	新学習指導要領への移行を完成させ、観点別評価基準の改善を行う。	科・コースごとに評価基準を検討し、それぞれの進路に適した授業を研究した。	4	4.0	各科目の履修時期を改善し模、擬試験の試験範囲に対応する。	4	4	4	5	4	4	4	4.1
		基礎学力の定着を目指す。	単元ごとの振り返り小テストや、書き込み式問題集などを効率よく用いて学力の定着を図った。	4		単位数が減少した中で進度を維持しつつ、内容を充実させる必要がある。	4	4	4	5	4	4	4	
	保体	主体的に取り組む姿勢を育てる。	授業の準備や片付け、準備体操までを生徒が主体的に行うように促し、学校行事へ繋げた。	4	4.0	体育祭や新体力テストなどの行事においても生徒主体に進める。	4	4	4	4	4	4	4	4.1
		健康で協働的な態度を育てる。	生涯に渡りスポーツに関心が持てるよう、楽しく、更に仲間を大切にチームプレーも意識させた。	4		この年代でしっかりと基礎体力をつけ、生涯にわたり健康を意識させる。	4	4	4	5	4	4	4	
	美術	思考力・表現力・判断力を発揮できる素養を身につける。	興味関心を創作意欲に繋げることを大切にして、生徒の思いと技術レベルに合わせた、技法指導を行った。	4	4.0	さらに制作意欲を高めるために、より高度な技法修得と制作環境づくりを心掛ける。	4	4	4	4	4	4	4	4.1
		美意識を高め、豊かな心を育てる。	鑑賞を通して、他者の表現や技法についても興味・関心を広げ、自己の作品制作に繋げることを狙いとした。	4		より深く鑑賞に向かうための、資質を高める授業を展開する。	4	4	4	5	4	4	4	
	英語	新教育課程に対応した授業内容の改善を行う。	英語科内で研究授業を行うとともに、英語科教員が各々模擬試験や入試問題等を研究し、授業に活かした。	4	4.0	新教育課程に基づいた教科書や副教材、入試問題等を引き続き研究し、授業の改善に繋げる。	4	4	4	5	4	4	4	4.1
		英検合格の支援をする。	英語科教員による事前指導、及び面接練習の機会を設けた。	4		新設された要約英作文への指導方法を検討する。	4	4	4	5	4	4	4	
家庭	観点別評価の見直しを行う。	昨年度の反省から、課題テストの内容を変更し、知識や主体性の差をはかれるよう工夫した。	4	4.0	評価の妥当性について、引き続き検討を続ける。	4	4	4	5	4	4	4	4.1	
	Peer Learningを中高で展開し、主体的な学びを深める。	教科の内容の理解度を深めるため、学び合いのスタイルで授業を展開した。	4		学び合いのスタイルを広げていく。	4	4	4	5	4	4	4		
情報	共通テスト「情報Ⅰ」に対応できる知識・スキルを習得させる。	様々な対策問題・外部模試を活用し、共通テスト対策を行なった。	4	4.0	「情報Ⅰ」を研究する。	4	4	4	5	4	4	4	4.1	
	正しいICTスキル・情報モラルを身につけさせる。	パワーポイントやTeamsを活用しスマートな授業を行った。	4		情報を教科内で共有し積み上げていく。	4	4	4	5	4	4	4		
創意実践科	プログラムの改善、検証を行う。	各科目において、教材の開発を行い、教員間で共有した。課題研究に全教員が携わる体制を維持した。	4	4.0	指導教材の確立と全教員による指導体制の維持を図る。	4	4	4	5	4	4	4	4.1	
	発表会の開催、改善を行う。	発表会を各学年で開催し、上級生の発表を聴く機会を設けるとともに、生徒同士の情報交換を活発化させた。	4		発表会の開催時期や実施方法の見直しや改善を行う。	4	4	4	5	4	4	4		
指導部	本校教育活動の成果が直接現れる部署であるという自覚を強く持って校務にあたる。「指し示し、導く」	新課程で学んだ生徒が初めて進路決定の機会に臨むのに際し、共通テストの問題予想と対策、新傾向の推薦・総合型選抜への対策を協議し実践する。	3	3.0	グラフの読み取りや複数資料の比較検討など、共通テストに代表されるような大変革に対しても、多くの生徒が対応できた。	3	4	4	4	4	3	3	3.6	
進学指導課	国公立・難関私立大学への合格者数を増加させる。	新傾向の推薦・総合型選抜への対策を協議し実践する。	3	3.3	現1・2年生の進路指導にフィードバックする形で活用し、受験だけでなく高校生活の充実に備えさせる。	3	5	3	5	5	3	3	3.9	
	新課程に対応した進学講座や個別指導を展開する。	共通テストの問題予想と対策、新傾向の推薦・総合型選抜への対策を協議し実践する。	4		多くの生徒が対応できているといえるが、すでに次年度の変化の兆しを掴む必要がある。	4	5	4	5	4	4	3		
	静岡理科大学との連携を強化し、受験生徒数を増加させる。	静岡理科大学の魅力を発信し、本校卒業生の近況を伝える。	3		受験生徒数は例年同様の水準で推移している。引き続き、在校生への情報伝達を続けていく。	3	5	3	5	4	3	3		
	キャリアイメージを抱きやすい実績の示し方を工夫する。	進学実績・進路実績の数値を示すだけでなく、進路決定までの取り組みや受けた指導を、生徒の言葉で示す。	3		学校説明会の機会等を通じて、中学生やご家族にも示すことができた。	3	5	3	5	4	3	3		
進路指導課	就職対策講座を実施する。	外部から講師を招き、就職対策講座を実施する。	3	3.3	就職希望生徒に系統立った講習を行うことで、前向きかつ主体的に受験に向かわせることができた。	3	5	3	5	4	3	4	4.1	
	地域の企業経営者と連携したキャリア教育を展開する。	公開求人が増加する傾向にある中で、本校生徒に対し堅調に求人をいただける地元企業との連携を強化した。	4		生徒の選択肢が増えただけでなく、地元経営者からも高校生と話す機会を得たことで好評を得た。	4	5	4	5	4	4	4		
	求人件数増を図る。	求人を公開し、広く人材を求める地元企業との関係を強化し、新規進路先として開拓した。	3		就職を希望する生徒の選択肢を増やすことができた。	3	5	4	5	5	3	4		
生徒指導課	校内の雰囲気より落ち着いた状態にする。	生徒同士の関係性の中から生じる様々な悩みに対応する。	4	3.7	教員同士の連携や生徒との信頼関係によって早期に発見・対応をしてきている。	4	5	4	4	4	4	5	4.2	
	自発的な規範意識を育む。	前年度までに段階的に緩和してきた頭髮服装規定の定着を図るとともに、生徒自身の自発的な取り組みを促す。	4		時代の変化に合わせて弾力性を持たせた規定を好意的に捉え、自発的に身なりを整えられる生徒が増えしてきた。	4	5	4	4	4	4	5		
	自らを自省できる姿勢を育む。	学校満足調査をリニューアルし、生徒自身の学校生活での取り組みをデータ化した。	3		学習・委員会・部活動等への取り組みを振り返りながら、他の生徒との望ましい関係性を振り返る機会となった。	3	5	4	4	4	3	5		
保健体育課	体育的行事の企画・運営により集団意識と責任感を育む。	学年ごとの球技大会をはじめとし、生徒による企画運営の機会を設ける。	4	3.5	企画する生徒だけでなく、参加すると同時に運営にも携わることができる機会へ進化させる。	4	4	4	5	4	4	3	3.8	
	3年間部活動に励んだ生徒の進路実績をまとめる。	3年間部活動に励んだ生徒の進路実績をまとめ、高校生活の一層の充実に繋げる。	3		先輩の部活動実績だけでなく、進路も加えた高校生活のモデルを示す事に繋がっている。	3	4	3	5	4	3	3		

研究開発部	SSH事業の研究開発課題「サイエンスイノベーション」によって地域の未来を共創する人材の育成」を達成するために、課題研究を用いた人材育成プログラムを校内外で展開する。	全校、全学科、全学年で課題研究の授業を実施し、第1学年で課題研究を進めるためのスキルを習得するための授業「解決デザイン」を実施した。	4	4.0	「問いを立てる力」を育成する方法を様々な試みながら、課題研究の授業に取り入れる。	4	4	4	5	5	4	4	4.2
		自由研究サポートと静岡県児童生徒研究発表会を組み合わせ、過去最大規模で実施した。	4		課題研究活動を活用して、小中高大や地域との連携教育を深化させる。	4	4	4	5	4	4	4	
	海外語学研修を中心とした訪問プログラムと姉妹校・教育連携校を受け入れるプログラムの改善による恒常的な国際交流プログラムを現在と近い将来の有益な形に最適化する。	科学英語を1～3年生全員で実施、SKYSEF等、対面とオンラインで国際連携教育を実施した。成果として英語での応答が上達した。	4		実験や実習をしながら表現することによって、英語が自然に話しやすくなる仕掛けを科学英語に加える。	4	4	4	5	4	4	4	
		課題研究の成果を地域や国際的な場で発表することによって交流を促進させた。	4		SKYSEFの開催、海外の姉妹校や教育連携校との交流等、国際連携教育を継続する。	4	4	4	5	4	4	4	
創意実践課 (SSH・課題研究)	問いを立てる力を育成する実施例を盛り込んだ「課題研究Ⅰ」と「課題研究Ⅱ」を実施する。	全教員が課題研究の指導に携わる体制を維持した。生徒と教員との対話や生徒同士の情報交換を活性化させた。	4	4.0	ワークシートの開発や教員研修を行い、問いを立てる力を育成し、研究テーマの質を向上させる。	4	4	4	5	4	5	4	4.2
	「解決デザイン(1年生全員)」で課題研究を進めるための基礎技能を高める試みを行う。	発表活動により発表資料の作成や発表の仕方、探究活動により課題研究の進め方、グラフ作成によりデータ処理の仕方の基礎を身につけさせた。	4		探究活動の内容および実施時期、実施方法の見直しや改善を行う。	4	4	4	5	4	4	5	
	「科学実験英語(1・2年生全員)」「科学対話英語(理数科・普通科全学年)」において、工夫を盛り込んだ実施例を構築する。科学英語とSKYSEFの相乗効果の検証を行い、開催方法の改善に繋げる。	発表活動を伴う探究活動を実施した。身近な事例や理科で学習している内容を取り上げた教材を使用した。	4		科学英語の教材開発を継続し、SKYSEFの相乗効果の検証を行い、開催方法の改善に繋げる。	4	4	4	5	4	4	4	
	静岡県児童生徒研究発表会を基軸とする地域連携を拡充する。	発表者の募集案内を静岡県内すべての小中高に送付した。県内SSH校との合同会議を行った。	4		参加者をさらに増加させる。合同会議を継続して行う。	4	4	4	5	4	4	4	
国際連携教育推進課	令和5年度の海外語学研修の内容を振り返り、今後の海外研修の実施方法をデザインする。	令和5年度に初めて実施した業者とコラボした語学研修の内容を点検、改善し、研修を計画した(3月に実施)。	4	4.0	将来的には、留学幹旋業者が行う海外語学研修の内容を参考にし、姉妹校と本校での研修を実施したい。	4	4	4	5	4	4	4	4.2
	これまでの姉妹校提携を振り返り、新たな姉妹校の提携や今後の交流の在り方を検討する。	豪州、台湾の高校との姉妹校提携に向けて相手校との連絡を密に行うと共に、法人内における調整を行い、実現に近付けた。	4		互いの生徒が訪問する計画を立て、実現に向けてのプログラムを作成する。	4	4	4	5	4	4	4	
	オンラインとオフラインを組合せ、本校で恒常的な国際交流が実践できる方法を試行し、事例を蓄積する。	海外校とオンラインで交流を行うことが恒例となり、担当教員同士の信頼関係も深まった。	4		対面での交流はSKYSEFの機会、オンライン交流は普段の時間を利用する等、費用を抑えて実施する方策を考案する。	4	4	4	5	4	5	3	
	SKYSEFに参加する海外校との連絡や交渉を行う。開催期間中の開会式、閉会式、発表会、文化交流会等で生徒が英語で主体的にコミュニケーションが取れる事前指導と運営を行う。	SKYSEFでは、国際コミュニケーション科の生徒が中心となって、積極的に海外生徒のバディや式典の司会を遂行し、フォーラムを盛り上げた。	4		ホストファミリーを希望する家庭が年によってかなり変動があるため、安定した数を確保する方策を考案する必要がある。	4	5	4	5	4	4	4	
中学校	目標生徒数を獲得する。	SIST駅前キャンパスにおいて、小学生を対象とした「夏休み自由研究サポート」を実施し、ブランド力を高める。	4	4.0	60名の定員に対して、受検者75名、入学者68名を獲得することができた。	4	3	4	5	5	4	4	4.0
	法人内大学・専門学校との連携プログラムを構築する。	静岡デザインとの「親子デザイン教室」や沼津日本語学院との「留学生と英語であそぼう」など募集活動に取り入れる。	4		どちらのイベントも90名以上の小学生を集めることができた。女子の受検者が30名になった。	4	3	4	5	5	4	4	
	高校卒業後の進学実績の向上を図る。	深い学びができる質の高い授業を実践するとともに、将来高い目標を持つことができるキャリア教育を行う。	4		授業力を高める教員研修を2回実施した。3年生の研修旅行で、東北大学を訪れ、教授から防災の講義を受けた。	4	3	4	5	4	3	4	
	SSZプログラムで育む「見つける力」「つなげる力」「ともにつくる力」を発展させ、豊かな発想力やそれを実現するための行動力・共働力を育む教育活動を研究する。	SSZプログラムの「探究活動」を見直し、「見つける力」「つなげる力」「ともにつくる力」をより育むものに発展させる。	4		平素の授業や学びの中から研究テーマを見つけて指導用のデータベースを作成し始めた。次年度以降さらに発展させ、指導に役立てたい。	4	3	4	5	4	4	4	
中学1年部	「基礎・基本の着実な習得」 教職員・生徒共に創意工夫を凝らして学習意欲を高め、科学的な思考力と国際感覚を養い、様々な課題に対して積極的に取り組む人材を育成する。	改めて「学校生活」＝「集団生活」であることを認識させるために、提出物を必ず出すことや、学年・学級のルールの厳守することを1年間を通じて徹底した。	4	4.0	新型コロナウイルス等の感染症対策として、今後も換気や加湿に留意しながら授業・諸活動等を展開する。進路指導について、次年度「キャリア教育」を踏まえた企業訪問等を実施し、目や耳で触れた経験を生かした事後指導を実施する。国内研修旅行について、「スキー研修旅行」を予定しているが、交通費や宿泊費等の高騰を鑑み、世情と生徒の実態に即した研修旅行の実現を図る。	4	3	4	5	4	4	4	
中学2年部	心の眼(芽)を育てる生徒の育成	定期的に訪れる行事等を意識させ、その時の「在りたい自分」を想像させ、そこに至る過程での目標を自ら設定し、計画を通して行動できる姿勢を身につけさせる。また、多くの物事との関わりの中で、一つひとつの課題にあきらめずに何度でも果敢に挑戦する精神を養う。	4	4.0	本年度は、自信による「成長の実感」を意識し、理想に近づくための「課題設定」と「行動」を心がけさせ、生活リズムと学習習慣の再構築を行った。その結果、自尊感情を高めながら、前向きに物事を進める力を身につけることができた。来年度は、多角的な視点を得るための機会を創り、義務教育の修了を意識させながら、「自立」を目指すための礎となる諸能力の育成を目指す。	4	3	4	5	4	4	4	
中学3年部	前進「与えられる側から与える側へ」	・与える側を意識した最上級学年としての姿勢や態度を常に考えさせ、リーダーシップ・フォロワーシップを一層強化した。 ・課題提出を守らせる意識を繰り返し持たせ、自己管理できる力を継続的に指導した。 ・進学学科選択を機に個々が描く将来ビジョンを2年次よりも具体化することができた。	4	4.0	リーダー会議(含む各種実行委員会)を毎週開催し、リーダーの成長により、集団としてのまとまりが高まった。特に学年合唱や体育祭などの行事では、生徒主導による練習を推進できたことで、生徒自身が集団でまとまる良さや達成感を味わえたと感じる。高校進学後は、北高校生のリーダー的存在として多くの生徒が活躍できることを期待したい。	4	3	4	5	4	4	4	
高校1年部	正しい見極めができる生徒になる。 そのために、正しい行動をとる。正しい情報を得る。正しい人間関係を構築する。	・生活における基本的なことを重点においた指導をした。 ・模試分析と課題を共有し、進路指導を展開した。 ・スタディアプリの活用を積極的に促した。 ・生徒が主体的に活動する機会を多く設け、自主性を養った。 ・生徒の活躍を積極的に発信し、各種活動の活性化に繋げた。	4	4.0	全体的に落ち着いた学校生活が送れているが、粘り強い指導を継続していく。スタディアプリを主体的な学習に繋げるための有効な方法を検討する。	4	4	4	5	4	4	4	

高校2年部	「一丸」仲間と、クラスで、学年で、目標に向かって団結して取り組む。修学旅行の成功を視野に入れて、2年生としての全ての学校行事でまとまり、リーダーシップをとり、学年全体として活性化を図る。	各学校行事では、クラスや学年として一つにまとまり目標達成に向かって積極的に参加させることが出来た。特に修学旅行では事前調べ学習から沖縄現地での平和学習や班別研修など、生徒が自ら計画し安全に行動することができ、とても満足のいく修学旅行であった。	4	4.0	第一希望の進路を決定し、卒業することを目標とし、意欲的に学習や部活動に取り組む姿勢を持たせる。今まで努力してきた力を最大限に発揮し、進路実現に向けて真っ向から勝負できる強い気持ちを持たせたい。	4	3	4	5	4	4	4	4.0
高校3年部	「初志貫徹」入学後、最初に思い立った時の気持ち、考えを突き通す。	学校推薦型・総合型選抜を有効的に利用することを視野に入れた指導を行って来た。理工科大学・法人内専門学校の有効な情報を定期的に発信することで、連携が深められた。また、学校行事を活用し、生徒個々が主体的に行動する環境を作り出し、達成感や成功体験を収められるようにサポートすることができた。	4	4.0	3年間を通して諦めずに粘り強く取り組む姿勢を身に付け、生徒自ら学習プランを立てることができるようになった。共通テストにおいては、まだ学力を伸ばせた部分はあった。一般入試前に27名の国公立大学合格者（普通科から5名の国公立大学合格者）を出すことができた。	4	4	4	5	5	4	5	4.4
			平均	3.8									4.1

学校関係者評価委員のコメント

○図書館の閉館時間がもう少し遅くまでならないでしょうか。本を読んだり自習したりしたいのですが、中々厳しいようです。

- ・何人かのリーダーとフォロワーが一丸となって自校の教育活動を創っていくことは一番の魅力だと思います。
- ・校長先生がいつも笑顔で挨拶をしてくれて気持ちがいいです。
- ・先生方の手厚い日々のご指導に心から感謝申し上げます。
- ・少子化の中、学校のブランドアップのために皆さんが大変頑張っていると思います。